

エウエン語の形態音韻論における数詞の特異性

鍛治広真

キーワード：エウエン語（ツングース諸語）、形態音韻論、名詞語幹、数詞、異形態

要旨

本論文¹ではエウエン語の名詞語幹を、接尾辞の異形態を説明する形態音韻論的観点から母音語幹、硬口蓋子音語幹、n語幹、その他の子音語幹の4つに分類する。接尾辞-lkAn「～を持っている」を付加する場合、母音で終わる語幹には-lkAnがそのまま付加される。子音で終わる語幹にこの接尾辞がつく場合は、子音連続を避ける措置がとられる。硬口蓋子音で終わる語幹には、挿入母音/l/が現れた異形態-lilkAnが付加される。/n/で終わる語幹は、一部を除き、語幹末の/n/が脱落し母音で終わる形になり、-lkAnが付加される。その他の子音で終わる語幹には、挿入母音/A/が現れた異形態-AlkAnが挿入される。しかしながら数詞にこの接尾辞を付加した場合、予測とは異なる特異な形が現れる。

1 はじめに

エウエン語²（ツングース諸語）の形態論は膠着型で、屈折や派生は接尾辞の付加によって実現する。接尾辞は多くの異形態を持ち、異形態の選択は音韻的条件により決定される。第2節で先行研究での音素体系について述べた後、第3節で名詞に接尾辞を付加したときの形態音韻論的振る舞いから名詞語幹の分類を試みる。第4節では数詞に接尾辞を付加した例を扱い、その特徴を記述する。

2 音素体系

2.1 母音音素

本稿では風間伸次郎(2003)に基づき(1)に示す8母音の体系を想定する。音節構造は(C) V

¹本稿は2010年6月に行った東京大学大学院の言語学演習での発表の内容に基づき加筆・修正したものである。コメントを下された方々に厚く御礼申し上げる。本稿で扱うデータは主に、2010年3月にロシア連邦サハ共和国にて筆者が行った現地調査で得られたものである。本調査は科学研究費基盤研究「地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究」（研究代表者：久保智之教授）による支援を受けている。

²本稿で扱うエウエン語は特に断りがない限り、サハ共和国インジギルカ川流域で話されているエウエン語を指す。この地域の方言はエウエン語中央方言に分類される(Novikova 1960)。2002年実施のロシア国勢調査によるとエウエン人の人口は19071人、エウエン語話者の人口は7168人となっている。ほとんどのエウエン語話者はロシア語とのバイリンガルであり、サハ共和国ではエウエン語、ロシア語、サハ語（チュルク系）の3言語を使用する話者も多い。

(V)(C)という構造を仮定している。エウエン語には母音調和があり、女性母音と男性母音³は同一語中に共起しない。

(1) 女性母音

| | 非円唇 | 円唇 |
|---|-----|----|
| 狭 | i | u |
| 広 | e | ø |

男性母音

| | 非円唇 | 円唇 |
|---|-----|----|
| 狭 | ɪ | ʊ |
| 広 | a | o |

他の先行研究では(2)に示す短母音 8 種、長母音 10 種の母音体系を想定している。(Novikova 1960, Lebedev 1978, Malchukov 1995)

(2)

| | | |
|-----|-------------|--------------------|
| 硬母音 | 短 /ɪ a o u/ | 長 /ɪɪ aa uʊ oo 'a/ |
| 軟母音 | 短 /i e ø u/ | 長 /ii ee uu øø 'e/ |

/a/および/e/は対応する短母音をもたない。

風間(2003)は長母音を音節内における同一母音の母音連続と解釈し、音素の数を減らしている。さらに、先行研究では単一の音素として扱われる/a/ および/e/についても、/ia/および/ie/という1音節内の母音連続として解釈している。本稿では風間(2003)の解釈に倣う。

2.1.1 母音の弱化

非円唇広母音の/a/および/e/は弱化して[ə]~[i]~[w]で実現することがある。以下にその例を示す。

(3)

| | | |
|---------|---------------------|--------|
| /udan/ | [udan~udin] | 「雨」 |
| /ewen/ | [eβən] ⁴ | 「エウエン」 |
| /urge/ | [urge~urgə~urgi] | 「重い」 |
| /falsa/ | [dʒalsu~dʲalsu] | 「唾」 |

この弱化は多くの場合自由変異とみられるが、決して弱化しない語や弱化が義務的に起こる語が少数ある。

(4) a. /irgé/ [irge] 「やすり」

b. /irge/ [irgə~irgi] 「脳」

コンサルタントは(4)の a,b を区別し、2つの語を同じ音で発音することを認めない。音韻的

³ 用語は風間(2003)に従う。

⁴ 本稿では β は両唇接近音の表記に用いる

対立があると考え、弱化しないことがわかっている母音は暫定的に /á, é/ のように表記する。
 どのような種類の対立であるかは今後明らかにする必要がある。

2.2 子音音素

子音音素は以下の 17 種類である。

(5) 子音音素 (17 種類)

/p, t, č[tʃ], k[k~x], b, d, ʃ[dʒ], g[g~ɣ], m, n, ñ[n], ŋ, s[s~ç~h], w[β~ φ], j[ij~ç], l, r[r~ɾ]/

| | 両唇音 | 歯音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 |
|----------|-----|-----|------|------|
| 無声破裂・破擦音 | p | t | č | k |
| 有声破裂・破擦音 | b | d | ʃ | g |
| 鼻音 | m | n | ñ | ŋ |
| 摩擦音 | | s | | |
| 接近音 | w | | j | |
| 流音 | | l r | | |

2.2.1 /j/の異音

音素 /j/ の異音は従来記述されている破擦音 [dʒ] の他に、 /i, i/ 以外の母音の前では自由変異として [dʲ] の発音も現れる。 /dia/ と /ja:/ の対立および /die/ と /je:/ の対立は中和している。

- (6) /jebdej/ [dʒebdaj~dʲebdaj] 「食べる」
 /jalsa/ [dʒalsu~dʲalsu] 「唾」
 /juuriʃur/ [dʒu:riɖʒuɾ~dʲu:riɖʲuɾ] 「(二人で)一緒に」
 /ʃøk/ [dʒøk~dʲøk] 「(河の)氷」

/i, i/ の前では /d/ と /j/ の対立が保持されている。

- (7) /jigenke/ [dʒiyənke] [*dʲiyənke] 「まな板」
 /digen/ [diyən] [*dʒiyən] 「4」

2.2.2 軟口蓋閉鎖音 /k/, /g/

/g/ は音節頭では閉鎖音の異音 [g] が現れ、音節末では摩擦音の異音 [ɣ] が現れる。

(8) 語頭の [g] の例

/gɾawkan/ [gʰa:βkan] 「口琴」 /gaasan/ [ga:san] 「溪谷」

(9) 語中音節頭の [g] の例

/hergin/ [hergin] 「低い」 /gurgawčɨdaj/ [gurgəβtʃɨdaj] 「働く」

(10) 語中音節末の[y]の例

/togu/ [toɣu] 「火を」 /braganja/ [bʲa:ɣəndʒa] 「月+指大辞」 /degi/ [deɣi] 「鳥」
 /togduk/ [toɣduk] 「火から」 /magʃɨr/ [məɣdʒɨr] 「虫」 /agdi/ [aɣdi] 「雷」

(11) 語末の[y]の例

/tog/ [toɣ] 「火」 /brag/ [bʲa:ɣ] 「月」

(12) 同一語中に[g] と[y]が現れる例

/aangag/ [aŋgəɣ] 「右の」 /gamagan/ [gəməɣəŋ] 「泥棒」

ただし、/VggV/は[VɣgV]とはならず 同化が起こり[VɣɣV]で現れる。

(13) /degi deggotten/ [deɣi deɣɣəttən] 「鳥が飛ぶ」

また、例外として/egʃen/ [egdʒən] 「大きい」は/g/が音節末だが[y]とはならず、必ず[g]で現れる。

話者によっては、語頭以外では[g]と[y]が相補分布ではなく自由変異として現れる。また摩擦音[y]の異音を持たない話者もいる。話者ごとの違いは(14)のようにまとめられる。

| (14) | | 語頭 | 語中音節頭 | 語中音節末 | 語末 |
|------|-----------|-----|-------|-------|-------|
| 話者 A | /g/ [g~ɣ] | [g] | [g] | [ɣ] | [ɣ] |
| 話者 B | /g/ [g~ɣ] | [g] | [g~ɣ] | [g~ɣ] | [g~ɣ] |
| 話者 C | /g/ [g] | [g] | [g] | [g] | [g] |

自由変異として[g~ɣ]の交替を許す話者(話者 B)は、無声軟口蓋音/k/についても閉鎖音[k]と摩擦音[x]の異音を持つ。[g~ɣ]の自由交替は語頭では起こらないが、[k~x]の交替は語頭、語中、語末のいずれの環境にも起こる自由変異である。

(15) 語頭 /kollɨ/ [kollɨ~xollɨ] 「飲め」
 語中(音節頭) /ʃapkan/ [ʃapkan~ʃapxan] 「8」
 語末 /tak/ [tak~tax] 「塩」

話者間でこのような差が生じている要因として年齢差、地域差などが考えられるが、十分なデータが得られていないため、この点に関してこれ以上詳細を論ずることは現時点では困難である。

2.2.3 摩擦音/s/

中央方言では[s]と[h]は母音間では交替可能である(例. [jasal ~ ja:hal] 「目」)。しかし母音間以外の環境をみると、[s]は音節末(語中子音の前または語末)にのみ現れ [h]は語頭にしか現れない、というように分布に相補的な偏りがみられる。Novikova(1960)、Malchukov(1995)らはこの二つを/s/という同一の音素にまとめており、本稿もこの解釈をとる。Lebedev(1978)は/h/にまとめているが、[s]と[h]を同一の音素の異音とみなすという点においては上の3者と同様である。風間(2003)は[s]と[h]をそれぞれ別個の音素(/s/, /h/)として扱っている。

/s/は非円唇狭母音/i, i/の後ろでは異音[ç]としても現れる。

(16) /asi/ [asi~açi] 「女」

2.2.4 鳴音の無声化

/j/と/w/は語末では無声化し、それぞれ[ç][φ]となる(風間 2003)。また/r/も同様に[r̥]となる。これらの無声化は義務的ではなく自由変異である。

(17) /huj/ [huç] 「吹き出物」
 /tiiniw/ [ti:niφ] 「昨日」
 /naakar/ [na:kəɾ] 「手土産」

3 名詞語幹の種類

本節では名詞⁵に接尾辞を付加したときの形態音韻論的振る舞いについて述べ、名詞語幹の分類を試みる。なお、以降では特に必要な場合以外は音声表記を省き、音素表記のみを記す。(ʔは省略する。)sとhは音声的隔たりを考慮して表記し分け、この点に関してのみ厳密な音素表記ではない。

3.1 接尾辞-lkAn と挿入母音

名詞に付加して「～を持っている」という意味を表す接尾辞は-lkan/-lken/-alkan/-elken/-ilkan/-ilken という6種の異形態を持つ。男性母音の/a/と女性母音の/e/のどちらが現れるかは、語幹を見れば母音調和規則から予測が可能である。男性母音/a/と女性母音/e/をまとめて非円唇広母音/A/として表すことにする。同様に非円唇狭母音/i/と/i/をまとめて/I/で代表する。接尾辞-lkan/-lken/-alkan/-elken/ -ilkan/-ilken の代表形は-lkAn と表記する。

母音で終わる語幹(以下、母音語幹)には挿入母音のない異形態-lkAn が付加される。

(18) 母音語幹：-lkAn
 ñiina 「皿」 ñinna-lkan

⁵ エウエン語においては名詞と形容詞の形態論的区別はない。

| | |
|----------|-----------|
| teti 「服」 | teti-lken |
| uču 「羽毛」 | uču-lkan |

子音で終わる語幹(以下、子音語幹)に-lkAn がそのまま接続すると、VC-lkAn という形になる。しかし音節構造は(C)(V)V(C)であるなら、3つの子音が連続することはない。実際には、このような子音連続を避けるために、子音で終わる語幹に-lkAn を付加する場合には、接尾辞の前に母音が挿入される。挿入母音には、(男性母音・女性母音の区別を捨象すると、) /A/と /I/の広狭2種類があり、どちらが挿入されるかは語幹末の子音によって決まる。

(19) 語幹末が硬口蓋子音(/č, j, ŋ, j/)以外かつ/n/以外の子音の場合：-lkAn

| | |
|-------------|-----------------|
| ur 「腹」 | ur-alkan |
| saahar 「砂糖」 | saahar-alkan |
| oosıkat 「星」 | oosıkatat-alkan |
| dıl 「頭」 | dıl-alkan |
| ıasal 「目」 | ıasal-alkan |
| hum 「臍」 | hum-elken |
| tak 「塩」 | tak-alkan |
| kiljeb 「パン」 | kiljeb-elken |

(20) 語幹末が硬口蓋子音の場合⁶：-ilkAn

| | |
|------------|------------|
| čaaj 「茶」 | čaaj-ılkan |
| oj 「服」 | oj-ılkan |
| tuǰ 「錫」 | tuǰ-ılkan |
| ekeñ 「ミルク」 | ekeñ-ilken |

ところが語幹末子音が/n/の場合は、母音挿入が起こらない。語幹末の/n/が脱落し、語幹が母音で終わる形になることにより子音連続が回避される。

(21) /n/で終わる語: 語幹末の/n/が脱落し、-lkAn を付加

| | | |
|--------------|-------------|------------|
| oran 「トナカイ」 | ora-lkan | 語幹末の/n/が脱落 |
| hılkan 「ナイフ」 | hılka-lkan | 語幹末の/n/が脱落 |
| uñkan 「さじ」 | uñka-lkan | 語幹末の/n/が脱落 |
| udan 「雨」 | uda-lkan | 語幹末の/n/が脱落 |
| hakarıñ 「黒」 | hakarı-lkan | 語幹末の/n/が脱落 |

⁶ ɛで終わる名詞語幹は見つけられていない。

hakarn 「黒」に接尾辞-stA 「やや～」がつくときに語幹末尾の/nが脱落するのも同様の現象である。(hakarn-sta 「やや黒い、黒っぽい」)

一方、以下のように語幹末の/nが脱落しない例も存在する。以降の議論で「n 語幹」と言う場合、(21)のように接尾辞が付く際に語幹末の/nが脱落する語幹を意味し、(22)(23)のような例は含めないものとする。

(22) ğin 「犬」 ğin-alkan

(23) limon 「レモン」 limon-alkan

これらの例が(21)と同じ振る舞いをしない(語幹末尾の/nが脱落しない)ことに対する説明として以下の可能性が考えられる。

- ・(22)は単音節語であり、/n/で終わる語は単音節語と多音節語が異なる振る舞いをする。
- ・(23)は借用語であるため固有語とは異なる振る舞いをする。

この現象について Malchukov(1995)は(i)接尾辞が付加されたときに脱落する/nと(ii)接尾辞が付加されても脱落しない/nの区別があり、(ii)は語幹末の母音が消失してできたものであると想定している。固有語についてはそのような説明が可能であるが、(23)のような借用語には当てはまらない。ロシア語からの借用語にしか現れない音素で終わる語の場合は/A/が挿入される。

(24) p̄erets 「胡椒」 p̄erets-elken

子音終わりの語幹であれば(19)のように/A/が挿入されるのが無標であり、借用語はその無標の規則に従うもの考えられる。

本節の考察から、接尾辞-lkAn の接尾辞の交替は、語幹の音韻的特徴によって条件付けられていると結論づけられる。(25)のように名詞語幹を分類し、異形態の現れ方をまとめられる。

(25)

| 語幹の種類 | -lkAn の異形態 |
|----------|----------------------|
| 母音語幹 | -lkAn が付く |
| n 語幹 | 語幹末の/nが脱落し、-lkAn が付く |
| 硬口蓋子音語幹 | -llkAn が付く |
| その他の子音語幹 | -AlkAn が付く |

4 数詞

前節で接尾辞-lkAn の異形態交替は語幹の音韻的特徴により条件付けられていると述べた。しかしながら、同じ接尾辞が数詞に付加された場合には予測と異なる形が現れる。

4.1 基数詞

エウエン語の基数詞と数を尋ねる疑問詞を(26)に挙げる。

| | | | | |
|------|-----|-------------|------|--------------|
| (26) | いくつ | adr | 16 | mian ñunjan |
| | 0 | nul | 17 | mian nadan |
| | 1 | ømen | 18 | mian ĵapkan |
| | 2 | ĵøer | 19 | mian ujun |
| | 3 | ılan | 20 | ĵøer mier |
| | 4 | digen | 30 | ılan mier |
| | 5 | tunjan | 40 | digen mier |
| | 6 | ñunjan | 50 | tunjan mier |
| | 7 | nadan | 60 | ñunjan mier |
| | 8 | ĵapkan | 70 | nadan mier |
| | 9 | ujun | 80 | ĵapkan mier |
| | 10 | mian | 90 | ujun mier |
| | 11 | mian ømen | 100 | ñama |
| | 12 | mian ĵøer | 1000 | tıkrıća |
| | 13 | mian ılan | 1万 | mian tıkrıća |
| | 14 | mian digen | 10万 | ñama tıkrıća |
| | 15 | mian tunjan | 100万 | million |

11以上の数は1から10の数詞を組み合わせて分析的に表す。ただし10を表すmianと20以上の数を表す時に用いられるmierは形が異なる。

(27) ĵøer mier nadan 「27」

4.2 数詞+IkAn

接尾辞-IkAnが数詞に付加される場合、(25)の一般化から予測されるものとは異なる形が現れる。(28)に基数詞、-IkAnを付加した実際の語形と(25)から予測される形を並べて示す。

(25)(再掲)

| 語幹の種類 | -IkAnの異形態 |
|----------|-------------------|
| 母音語幹 | -IkAnが付く |
| n語幹 | 語幹末のが脱落し、-IkAnが付く |
| 硬口蓋子音語幹 | -IkAnが付く |
| その他の子音語幹 | -AlkAnが付く |

(28)

| | 基数詞 | 基数詞-lkAn | 予測される形 |
|------|-----------|----------------------------|-----------------|
| いくつ | adı | adı-lkan | adı-lkan |
| 1 | əmen | əme-lken~əmi-lken | əme-lken |
| 2 | ǰəər | ǰəər-elken | ǰəər-elken |
| 3 | ılan | ıla-lkan | ıla-lkan |
| 4 | digen | dige-lken~digi-lken | dige-lken |
| 5 | tunǰan | tuǰa-lkan~tunǰı-lkan | tuǰa-lkan |
| 6 | ǰunǰan | ǰunǰe-lken~ǰunǰı-lkin | ǰunǰe-lken |
| 7 | nadan | nada-lkan~nadı-lkan | nada-lkan |
| 8 | ǰapkan | ǰapka-lkan~ǰapki-lkan | ǰapka-lkan |
| 9 | ujun | uju-lken~uji-lken~ugi-lken | uju-lken |
| 10 | mıan | mia-lkan~mıag-alkan | mia-lkan |
| 20 | ǰəər mier | ǰəər mier-elken | ǰəər mier-elken |
| 100 | ǰama | ǰama-lkan | ǰama-lkan |
| 1000 | tıkıča | tıkıča-lkan | tıkıča-lkan |

9以下の基数詞は、ǰəər「2」を除くと、いずれも2音節であり/n/で終わる。したがって、末尾の/n/が脱落してlkAnが付くことが予想され、確かにそのような形(əme-lken「1+lkan」など)が現れる。しかしながらこの形以外に、/n/が脱落し第2音節の母音を/l/に変えて-lkanをつけた形(əmi-lkenなど)も現れる。(28)ではəmelkenとəmilkenは接尾辞の形態は同一で、語幹が交替しているとみなしてəme-lken~əmi-lkenとした。第2音節の/l/が接辞側に属す(əmilken)と分析だと/m/の後に-lkanが現れると考えることになるが、その場合/m/で終わる名詞に-lkanが付加した例との整合性がとれない。əmilkenのような形が生じるのは接尾辞-lkanの特徴と言うよりは、数詞というクラスの特徴である。数詞の語幹がəme-~əmi-のように交替するだけで-lkanの異形態の現れ方は一貫している。əmi-のような/l/で終わる語幹の異形態は、後述する序数詞からの類推によってできたと考えられる。

「9+lkan」は基数詞ujunから予測されるuju-lkenという形、および第2音節の母音を変えたuji-lkenという形のほかに、/j/が/g/に交替したugi-lkenという形もある。「10+lkan」は基数詞mıanの形から予測されるmıalkanの他にmıagalkanという/g/が挿入された形もある。mıagalkanの例は、音節間での母音連続を回避するために/g/が現れると考えられる。ugilkenの例もujilkenの/j/が脱落して母音連続が生じ、そのため/g/が挿入された結果できた形(ujilken > uilken > ugilken)と考える⁷。

⁷風間(2003)によれば東方言では[y]が前舌母音の前後で[j]と交替し、円唇母音の前後で[w]と交替するという。

4.3 序数詞

基数詞は序数詞に接尾辞を付加して派生される。序数詞を派生する接尾辞は-Is と-ItAn の2種類が確認されている⁸。

| (29) | 基数詞 | 序数詞(-Is) | 序数詞(-ItAn) |
|------|-----------|-----------------|---------------------|
| いくつ | adı | adı-s | adı-tan |
| 1 | emen | emi-s | emi-ten |
| 2 | ǰeer | ǰeer-is~ǰeeg-is | ǰeer-iten |
| 3 | ılan | ıli-s | ıli-tan |
| 4 | digen | digi-s | digi-ten |
| 5 | tunǰan | tunǰı-s | tunǰı-tan |
| 6 | ñunǰan | ñunǰı-s | ñunǰı-ten |
| 7 | nadan | nadı-s | nada-tan~nadı-tan |
| 8 | ǰapkan | ǰapkı-s | ǰapkı-tan |
| 9 | ujun | uji-s~ugi-s | uji-ten~ugi-ten |
| 10 | mıan | mıaj-is~mıag-is | mıaj-itan~mıag-itan |
| 20 | ǰeer mier | ǰeer mier-is | ǰeer mieg-iten |
| 100 | ñama | ñama-s~ñamı-s | ñami-tan |
| 1000 | tıkıča | tıkıča-s | tıkıča-tan |
| 100万 | million | million-as | million-atan |

語幹と接尾辞の境界が不明瞭な語形が多いが、ǰeer「2」:ǰeer-is:ǰeer-iten「2番目の」、ǰeer mier「20」:ǰeer mier-is:ǰeer mier-iten「20番目の」のような境界がはっきりしている例からそれぞれの接尾辞の代表形を-Is、-ItAnとする。

emi-s や emi-ten など(em-is、em-itenと見ても)、基数詞が2音節で末尾が/n/で終わっている数の例は、語幹の形がかなり変化している。前節で述べたように、数詞に-lkAnがついたときに//で終わる特殊な語幹(emi-lken, digi-lken, tunǰı-lkan, ñunǰı-lkin, nadı-lkan, ǰapkı-lkan, uji-lken)が現れるのは、ここに掲げた序数詞からの類推によるものと考えられる。

ri-gl-γIの交替は数詞以外には見つかっていない。同一の音素の異音が交替しているのではなく、別個の音素として/r/[r]と/g/[g-γ]を想定する。

4.4 その他の序数詞

前節で述べた基数詞から派生する接尾辞以外に、以下のような語彙的な序数詞がある。

(30) nonap 「1番目」

⁸ 2種類の序数詞の意味・用法などの違いは本稿では考察の対象としない。

gia 「2 番目」

これらの語は他の数詞と組み合わせて「11 番目」「12 番目」などの意味で用いることができない。

(31) 「11 番目」 mian emis, mian emiten, *mian nonap

「12 番目」 mian jøeris, mian jøeriten, *mian gia

gia はそれ自体が「2 番目」を表す語だが、さらに序数詞を作る接尾辞-ItAn が付加されるという点が興味深い。

(32) gia-tan 「2 番目」

5 おわりに

本論文ではエウエン語の名詞語幹を接尾辞の異形態を説明する形態音韻論的観点から以下の4つに分類することが有用であることを提案する。

- ・ 母音語幹
- ・ 硬口蓋子音語幹
- ・ n 語幹
- ・ その他の子音語幹

また、数詞に名詞と共通の接尾辞を付加した場合、名詞とは異なる特異な形が、序数詞からの類推により現れることを示した。

参考文献

- 風間伸次郎 (2003) 『エウエン語 テキストと文法概説』(ツングース言語文化論集 23). 大阪学院大学情報学部
- Lebedev, Vasilij Dmitrievich (1978) *Jazyk evenov jakutii*. Nauka, Leningrad
- Malchukov, Andrej L. (1995). *Even (Languages of the world : Materials ; 12)*, Lincom Europa, Munchen
- Novikova, K.A. (1960) *Očerki dialektov evenskogo jazyka: ol'skij govor: chast' 1*. Izdatel'stva Akademii Nauk SSSR, Leningrad

The Idiosyncrasy of Numerals in Ewen Morphophonology

KAJI, Hiromi

Keywords: Ewen(Tungusic), morphophonology, nominal stem, numeral, allomorph

Abstract

This paper proposes to classify the nominal stems of Ewen into the following four classes according to the morphophonological criterion which explains the allomorphs of some suffixes.

1. Stems ending in a vowel
2. Stems ending in a palatal consonant
3. Stems ending in /n/
4. Stems ending in a consonant other than the above

The suffix /-lkAn/ 'having ...' shows complex but clearly conditioned allomorphy. When it is added to a stem ending in a vowel, the alternant /-lkAn/ occurs. When it is added to a stem ending in a consonant, the following processes are invoked in order to avoid undesirable consonant clusters. After a stem ending in a palatal consonant, the allomorph /-lkAn/ occurs with the epenthetic vowel /i/. Stems ending in /n/ occur, with a few exceptions, without the final /n/, and the allomorph /-lkAn/ is attached to the stem-final vowel. Stems ending in a consonant other than those mentioned take the allomorph /-AlkAn/ with the epenthetic vowel /A/. However, unpredicted forms occur when it is added to cardinal numerals. For example, when the suffix is attached to /ømen/ "1", the stem becomes an unexpected form /ømi-lken/, which looks similar to the corresponding ordinal numeral /ømis/. I argue that such irregularity can be explained by analogy.

(かじ・ひろみ 博士課程)